

ある日の秋

午後、昼食を済ませてソファーにくつろぎ、何とはなしに外を眺めていた。小高い山の上にある彼の家は大都市の街並みを見下ろしている。庭にはコスモスが淡紅色の花をつけ、入道雲も、もはや高く昇らず空は夏の終わりを語っていた。

昼下がりの満ち足りた静寂は、隣室の電話によって乱された。彼の妻が受話器を取る。「もし、もし……………」。「……………」彼の妻はドアを開けて告げる。「あなた……………中央雑誌社の山本さんからお電話ですよ。」「うん。今行くよ。」心地よい気持ちをソファーに残していくような気が、彼にはした。

「もしもし、山本さんですか。いつもお世話になります。今日は、また、何か……………」。「北城さん、……………大変なことをしてくださいましたね。盗作なんて……………」。「なんてことを急に、……………」。「さっき、編集部に投書が舞い込んだのです。『狩場』の作品にそっくり同じものがあるって……………。その作品が載っているのは『荒野』という同人誌ですがね。」「バカな、そんな同人誌なんて、見たことはもちろん、聞いたこともない。」「……………一度、社までご足労いただけませんか。その同人誌もあることですから。」「わかりました。これからすぐに伺いましょう。」

彼は受話器を置くと、先ほどのソファーに腰を下ろし、頭を抱え込んだ。心地よい温みはすでにソファーから消え去っていた。彼は妻にタクシーを呼ぶように言いつけ、そのまま外をぼんやり見つめた。これから行く雑踏の中のビルの方角を見つめた。

彼には覚えがなかった。あんな小さな同人誌の盗作など思いもよらないことだ。彼は作家として自負心の強い男であった。良いものを書く自信を持っていたし、事実彼の小説は良く売れていた。問題の同人誌は彼の作品が出る半年前に発行されたものであった。そうでなかったら盗作と疑われるのは、その同人誌の作者であるはずで、彼のような有名作家が疑われようはずはない。しかし、その作品を読んでみると、まったく同じような場面に同じような表現がなされていた。

「どうですか。北城さん。」と編集長の岩瀬は言った。「まったく、私には覚えがありません。先ほどお電話でお話ししたようにこの同人誌を見たことも、もちろん読んだこともありません。たとえ読んだにしたって、他人のものをまねればならないほど作家としての私は困っていません。ばかな……………まったくもって……………」。「でも、あなたの作品より半年も前に出ていることは事実ですし、……………。同種の投書は城都新聞にも行っているらしい。あなたは有名作家でもあるし……………。ひと騒ぎ起きますよ。」「……………」。「……………」

彼は雑誌社を辞して、街の雑踏に出た。しばらく歩いてから、タクシーを拾い、いつも行くバーに行った。人ごみを縫って車はのろのろ流れ、彼はいらだった。ドアを開け中に入る。暗いうちに目がなじまない。

「いらっしやい、北城さん。ちっともいらっしやらなかったのね……………」カウンターに座るなり、一言彼は言った。「いつもの……………」。「いらっしやい、先生。」女たちが

あまりにも人工的な表情をして、人気作家の両側に寄ってくる。彼は一息にウィスキーを飲み干し、再び外に出てしまった。後に、女たちの、啞然とした好奇の渦巻きが尾を引いていた。

雑踏はすでに薄暗くなろうとしていた。ビルの山々に陽は没しようとしていた。すれ違う人々は彼の存在など意識していない。皆、何か楽しいことでも待っているかのように、家路を急いでいた。あのラッシュアワーの電車に乗る時にすら、一瞬の戸惑いを見せるだけだった。

彼は考えてみる。盗作した覚えはない。このことは確かだ。あの作品と同じ描写が同じ表現でもってなされていることは事実だ。いっそ盗作でありたかった。盗作する者はそれを盗作であると意識して書く。ところが彼は無意識のうちに盗作と疑われるようなものを書いてきた。無意識に……。

……重要だ。自分はそのような小さな同人誌作家と同じ程度にしか書けないのか。そんな作家たちに容易に真似して書かれるほど、自分の作品は新鮮さ、独創性を失っているのか。電車は身動きできないほど混んでいた。彼は漫然と、窓辺に額を押しつけられながら外を眺めていた。後ろのほうで誰かが話しているのが煙草の煙のように彼の耳に漂ってきた。

「へえ、……あの有名作家がねえ……。」「……あの作家もついに話のたねに困るようになったか……。」「うん。そのうち飯のたねにも困るようになるさ」「その点、俺たちのようなサラリーマンは……何の出世のたねもないが、飯のたねだけには困らないや……。」

彼は過ぎゆくこげ茶色に煤けた街並みに鈍感な感受性を思い、小駅に咲くコスモスに赤トンボの郷愁、いつか知らず深まりゆく初秋を感じた。それは四十半ばを過ぎた彼にとって深まりゆく人生の秋でもあった。

家に帰った彼は和服に着替え、妻に詳細を話そうと居間に入っていった。突然、テレビの台の下に視覚が吸い込まれた。赤い地に晴緑の針葉樹が図案化された、あの同人誌の表紙が目反射してきた。「これ、誰がもってきたんだ。」「何ですか、あなた……。」「これだよ。この本さ。誰がここに置いたんだ。」「あら、そこにあったのですか。あなたがお読みになってから、私、読みたかったのですが、……。あなた、そんなところに置き忘れていたのですか。」「え、私が置き忘れたって……。それで、私が読んでいたというのかね。」「そうですよ。健が大学で友人にい無理やり買わされたって、あなたに見せていたではありませんか。もう半年も前になりますかしら……。」「……私が読んだ……。」「あなた、下手な本だって笑ってみてたじゃありませんか。」「……。」

(無意識のうちに、他人のことばを) 自分のもものとして話していた。ぼくらの言葉は自分のももののだろうか。ぼくらの考えは自分自身の考えなのだろうか。昨日誰かが語った言葉であり、大昔誰かが悟った考えではないだろうか。自分のことば、考えはどこに存在するのだろうか。今か、昨日、大昔か、あした、未来か……山の上か、海の中か、……空、雲の下か……。

1968年 静岡大学児童文学研究会はばたき第3号：73-76.